に覆さるべかりしなり、されど此の如きはもとより氏の一時の謬見にして、二三の支那史料に紿かれたると、及びその誤解にすぎず、同年早くもドヴェリア氏は「支那のマホメット教及びマニ教」と題して、ほゞ同一の史料により て摩尼教の Manicheism なるを論證し、翌年にはマルクァルト氏又た更に回紇碑文に關して論述し、(Marquarth: Historischen Glossen zu den alttürkischen Inschriften: Wiener Zeitschrift. f. d. K. des Morgenl. Vol. XII.) 其後ペイオ氏また之れに關する考を發表して、(前出) 今や摩尼教が Manicheism にして、回紇碑文に其の國に入りしことを記せる新宗教も、亦た此宗教なることは一般に疑を存せざる所なりとす、されど由來唐代に於る所謂三夷の教は、等しく西方波斯、大秦の地方より輸入せられ、而して之れに關する記錄は極めて乏しく、また曖昧なること、彼の佛祖統記、僧史略の如きにすぎざれば、屢々疑義の此間に挿まるゝものあり、而して諸學者の回紇碑文に關する解釋も、未だ必ずしも絶對的の確證を與へたるものとは爲す可らざる點あり、今先づ順序として先人の間に慕闍なる名に就いて攷究せられたる次第を略述すべし。太平寰宇記百八十六卷吐火羅國の條下に曰く、

開元七年、其葉護支汗那帝賒上表、獻天文人大慕闍、試加試驗、

と、又た册府元龜九百七十一卷に曰く

(開元七年六月)吐火羅國支汗那王、帝賒上表、獻解天文人大慕闍、其人智慧幽深、間無不知、伏乞天恩喚取慕闍、親問臣等事意及諸教法、知其人有如此之藝能、望請令其供奉、並置一法堂、依本教供養、

と、又た同書九百九十七卷にも、殆んど同様の記事ありて、只だ二三字の相違と、其の最後に「其長男吉獵顚」の五字を附加せり、此等兩書の記事はもとより同一事項にして、册府元龜によりて前者の盡さゞる所を知り得べきな